
自分の中、もう一人のVampire

因幡 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分の中、もう一人のVampire

【NNコード】

N8359L

【作者名】

因幡 悠

【あらすじ】

自分が変わっていく、・・・。

吸血鬼 ヴァンパイア の凶暴な本能に呑まれる。

人格の覚醒

十六歳になつた次の日、自分の中のもう一つの人格が覚醒した。最初は気のせいだと思つていたけれど、頭の中から話し掛け来るのは、確かにいた。

それがこの頃、変な事を言つよつになつた。

『お前は人間じゃない』

そう、毎日毎日繰り返す。
もう耐えられない。

「父さん。少し良いか?」

「うん? 珍しいな」

軽く笑う父さんに、思い切つて人格の事を打ち明けた。

「そつか・・・とうとうお前にも来たか・・・・・」

どう言う事だ?

「何だよそれ」

一瞬戸惑いながらも、父さんは訳を話した。

“お前は人間じゃない”。確かにそつ聞こえるんだな?』

「そうだ」

「・・・・・オレ達はな、皆人間ではない。異種族・・・吸血鬼な
んだよ」

吸血鬼^{ヴァンパイア}

「は？何・・・言つてんだよ？オレは今までずっと人間として過ご
して来て・・・血が・・欲しいと思つた事なんか一度もない！！！」

「当たり前だ。ヴァンパイアの本能が覚醒するのは十六歳を過ぎて
からだ」

そんな事があつてたまるかよ！

今まで普通に過ごしてきたのにヴァンパイアだつただあ？
ふざけるのも大概にしろよ！

底なしの不安と衝撃に襲われた。

「父さんにも・・・もう一つの人格があるのか？」

「あるよ」

オレが知らなかつただけか。

「見たいのか？」

「・・・ああ」

「最初に言つとくが、裏の人格を出すと凶暴性が増す人が多い。オ
レは大丈夫だが、他では気を付けろよ」

やつ血ゆび、父さんは椅子から立ち上がる。

「 ょーへ見てるよー 」

「 ・・・・・・・・・・・・で? 」

特に変わった様子はない。

『 で? じゃねえよ。変わってるじゃねえか 』

変わっていた。

やつには声は同じでも、立り振る舞いや雰囲気が違つ父さんがいた。

「 父さんのか? 」

『 ナウだよ? お前のと・つ・れ・ん 』

父さんは伸びをした後、ゆっくりと歩き出した。

「 何処行くんだ? 」

玄関へ向かう父さんに声をかけると、父さんは不思議そつなか顔をした。

『 血イ吸いにだら? 』

は?

「 ちよつと待てえー 」

何だつて？

“血イ吸いに”だと?
やつぱりヴァンパイアなのか？

「ああモフー戻れえ！！元に戻れ！」

急いで怒鳴った。

『んだよお・・・久々に外に出られたのによお』

軽く舌打ちをすると、また雰囲気が変わった。

「父・・・せん？」

「ん?どうだつた?」

安堵の溜め息が零れた。

「なんちゅーか、大変な人だつた・・・でも、凶暴ではなかつたよ」

「あはは。そうかそうか。まあしかし、お前は気を付けるよ?オレはもう一つの人格と意志疎通が出来るから良いが、全てがそうとは限らない。お前の場合はとても凶暴で、言う事を聞かないかも知れないからな」

「分かつた」

そう応えると父さんは安心した様で、顔を綻ばせた。

「それで、他に聞きたい事はないか？オレで答えられる事ならなんでも良いぞ？」

「オレ達は血を吸わないと、生きていけないのか？」

「いや、別に大丈夫さ。血は吸わなくても変わらない。まあ吸つたら吸つたで身体能力が上がったり、気持ち良くなるだけって感じ？あつーでも、丹に一回位はビーしても血が欲しくなる時あるやで？」

「せん時父せんばぢりすんだ？」

聞くと父をせにやつと笑った。

「愛する妻か、ひ・・・ね」

結局貰うんか。

「へえ」

「じゃあ、もう一つの人格を封じ込める方法は？」

「封じ込めるのは無理だろーよ。本能だし」

「せんじゅビヒヤッて抑制きかせとのせ？」

「フーン・・・理性？」

適当じやんか。

「まあでもさ、お前も頑張れよ！」

「何をだよ」

「何かをだよー。」

溜め息をつくオレの頭を撫で回しながら父さんが言った。

「心援してなんからな。出来る限つの事はやつてやんよ」

オレのわざわまでの不安は消え去り、本当に笑顔になっていた。

「ありがと。頑張つてみるよ。出来るだけはな。また相談するな」

「ああ」

父さんも笑っていた。

この後、どんな試練があるかなんて想像してなかつたけれど。

侵食

今まで学校が苦痛だと思った事はなかった。
そんな学校が今は耐え難い。

周りから美味そうな匂いがする。

喰いたい。

喰いたい！

外に出せ！

「五月蠅い・・・・・・！」

話し掛けてくるな！

オレの中から出てけよー！

ずっと話し掛けて来るもう一人の“オレ”に、苛立ちを感じていた。

「尊^{みこと}・・・大丈夫？」

「千春^{ちばる}・・・」

いつものオレと違和感を感じたのだろう。
友達の千春が心配そうな声を掛けた。

「顔色悪いよ？ 体調悪いの？」

普段なら心配してくれるのはありがたいが、今日に限っては近寄らないで欲しい。

何をしちまつか分からぬ。

「ん・・・大丈夫・・・・。何ともないから」

体が怠いのは、単に血が欲しいからだろう。

分かつているさ。

アイツが騒ぎ立てるから。

嫌でも思い知る。

そして思い出す。

『お前は人間じゃない』

未だに心配そうにオレの周りを彷徨いでいる千春を退けると、屋上へ走った。

人が居ない所へ行きたい。

匂いが敏感過ぎる嗅覚を刺激して、目覚めたばかりの本能が暴走してしまう。

屋上の扉を勢い良く開け放ち、転がり込んだ。

「ハツ・・・ハツ」

呼吸が荒い。

その場に座り込み、深呼吸した。

落ち着いたら、またアイツが話し掛けてきた。

『何故逃げる？お前は目覚めたばかりで、一番血を欲する時なのに』

「黙れ」

『本能に逆らうなよ。オレを外に出せ』

「出たわや出れば良こ」

『 いつも行かないから出せって言つてんだよ。オレは血が体内に入つてこなきや、自力ではどうにも出来ない』

「 やうか・・・そりゃいい事聞いたよ」

絶対に血を吸わなければ良いんだろ?
簡単じゃないか。

「 血を吸わなくとも死なねえなら、オレは絶対吸わねえよ」

『 まあ、せいぜい頑張れば良いぞ』

“ 抗う事は不可能だからな” と言い残して、アイツは静かになつた。
今、予鈴が鳴つた。

「 行かなきや・・・」

立ち上がった途端、視界がブレた。

「あ・・・れ?」

何かが倒れる音。

「 くそつ・・・体が動かねえ・・・・・・!」

またアイツが出て来やがつた。

『 血を吸わなくても死なねえけど、どんどん弱っていくんだぜ?』

「んだよ・・・・それ・・・・」

『不便なもんでよお。死なねえのに弱つてくんんだぜ?最悪だと思わねえ?お前は目覚めたばかりだから、余計弱りやすい。血を吸わねえと動けねえよ。尤も、血を吸つたらオレも力を得ちまつ。どうするよお?』

良い。ひ。

やつてやるよ。

オレはお前に勝つてやる。

オレは自分の手首に牙を突き立てた。

「痛つてエ!」

体全体に激痛が走る。

『クククツ・・・・』

痛みに藻搔くオレを、アイツは笑つた。

『バーカ。そんな弱つた体、取つたといひで自由に動けもしねえ。

今日は眠る。』

だつたら最初から出て来るなよ。

ふらつく体は再び倒れ込み、オレは意識を失つた。

自分の“身体”？

「尊！尊！！ねえ！しつかりして！」

「んつ・・・」

誰だ？

オレを呼ぶのは。

「千春！尊は！尊はいたか！？」

「ながれ流！早く！！」

五月蠅いな。

「尊！おい！大丈夫か！？」

「あつ・・・・・？なが・・・・・れ・・・・？」

そうか。

流か。

加藤 流。

オレの親友。

医者を目指していて、家族も医者一家らしい。

そんなんで相当医学にも詳しい。

まあそれは置いておこう。

それどころじゃない。

オレが。

「何でこんな所で寝てんだよ！？とっくに畳だぞ！」

「ははつ・・・寝てたつづうか、気を失ってた感じ？」

「貧血か？顔色悪いぞ？」

「私も心配したんだからね！」

「ああ・・・ごめん」

そう言つと安心したのか、教室に戻ると言い出した。

「・・・・・・・・・・・歩けよ」

ちよつと待て。

「貧血なんですケド。連れてつてよおー」

「死ね

とか良いながら連れてつてくれるんだよね。
しかし、教室行つて神経保てるかな？

『自信ねえのか？』

『また出て来やがつた。』

オレは、流達には聞こえない程小さな声で呟いた。
「黙つてろよ」

『嫌だね。今度はお前が少し黙る番だ』

「はつ！？」

そこでブツリと何かが切れた。

「尊？ どうした？」

支えてくれている流が、心配そうな顔で見ている。

『流れ。オレさあ、保健室に行くわあ。ほら、腕も怪我してるしな
あ』

オレがわざわざ隠していた腕を、大っぴらに掲げて見せた。

「なっ！？ いつの間にそんなになつてたんだよ！」

『さつきだよ、さつきい。ほら、予鈴鳴つてる。センサーに言つと
いてなあ』

「分かつた・・・

渋々教室へと走つて行く流達を見送りながら、一人ほくそ笑む。

『初めての体だあ。まずは慣れだな。取り敢えずは包帯でも貰つて
くんか』

ひたひたと廊下を歩く。

オレの意識はあるのに、体は言つ事をきかない。

オレの体なのに、オレの“身体”じゃない。

アイツの体

『あ？ まだ意識あつたのかよ。五月蠅いから寝とけ』

そこで意識を本当に失つた。

『さあーて、ここからがオレの領域だ』テリトリー

不気味な笑みを浮かべ、保健室へと繋がる廊下をオレは歩いた。

『失礼しまーす。センセエ？』

「あら？ 中島君じゃない」

出迎えてくれたのは、若くて綺麗な保健医。

「ちょっと！ どうしたの！ ？ その左腕！ 早くいらっしゃい！」

左腕の異様な様子に気付いた先生は、オレを椅子へと腰掛けさせた。

「全く・・・。どうしてそうなったのよ？」

『少し転んでしまって・・・』

「少し転んだだけでそういうもん？ まあ良いわ」

疑いながらも手当をしてくれた。

『ありがと、センセ』

「はあい」

それじゃ本題に入ろうかあ？

『ねえ、センセ？ オレがヴァンパイアだつて言つたら・・・。どうする？』

「うーん、そうねえ」

にこにこと微笑む先生。

『笑つてるけどさあ・・・。本当だよ？』

『えつ？』

驚いた顔がそそるねえ。

『オレねえ、すつ』おーく腹減つてんだよねえ。先生、提供してくれんない？』

「何・・・。を？『冗談・・・よね？』

『うーん、本気だよあ？だからくれない？ 血イ』

じりじりと壁際へ追い詰めて行く。

『大丈夫。痛くしないしい。あるのはさあ、快樂だ・け』

『やつ・・・中島君・・・！止めつ・・・つ』

突き立てられた牙は、首筋へと埋まっていく。目覚めてから初めて味わった、他人の血の味。力が漲つて来るのが分かる。

暫く血を貰つた後、先生を椅子へ座らせた。

『ありがとう、先生。今日の事は秘密ね？』

先生は呆けたまま、頷く。

『じゃあね』

満面の笑みを浮かべ、保健室を去つた。

『さて、力も出て来た事だし、これからは楽しい事がたあーくさんだねえ』

その時、“表”が起きてきた。

「・・・ろ・・・やめろ・・・」

『つあ？ んだよ・・・出て来よつてかあ・・・？』

頭が割れるように痛い。

『お前も・・・分かつただろう？・・・つ力があ・・・漲るのを・・・・！』

「力なんて・・必要としてない。オレの“身体”だ・・・。返せえ！」

『くつそ！』

オレが引っ張られる？

やつと好きに動くのに！？

でも、抗う力がない。

逆ラエナイ

？

「つは・・・はつ」

やつと裏から“身体”を奪い取つた。

「つ・・・氣持ち悪い」

氣持ち悪い？

「・・・違う」

アイツの言う通りだ。

力が漲り、気分が高揚していた。

「やつぱりオレも化け物かよ・・・？」

言いようのない絶望感がオレを襲う。

オレは一人、涙を流した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8359/>

自分の中、もう一人のVampire

2010年10月28日07時13分発行